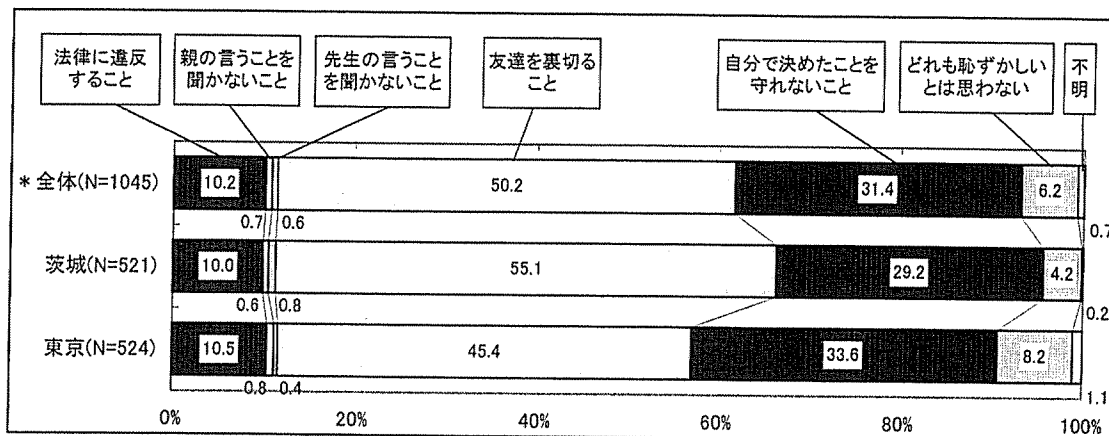


⑤ 恥の意識

(図表 48) 最も恥かしいと思うこと



(図表 49) 最も恥かしいと思うこと別いじめの加害体験

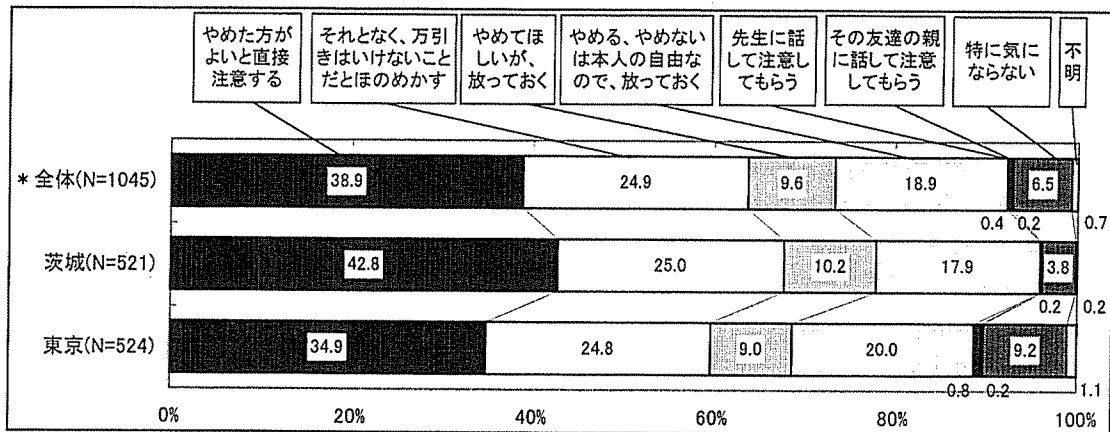
	積極的 関与	義務的 関与	意識外 関与	傍観	なし	不明	総計
法に違反	2.8%	5.6%	29.9%	27.1%	34.6%	0.0%	100.0%
親に背反	14.3%	0.0%	14.3%	57.1%	14.3%	0.0%	100.0%
先生に背反	0.0%	0.0%	16.7%	16.7%	66.7%	0.0%	100.0%
友達を裏切る	6.1%	5.3%	35.2%	25.3%	27.2%	0.8%	100.0%
決意を不実行	5.2%	4.0%	37.5%	25.6%	27.1%	0.6%	100.0%
恥なし	9.2%	1.5%	49.2%	21.5%	18.5%	0.0%	100.0%
不明	0.0%	0.0%	14.3%	14.3%	57.1%	14.3%	100.0%
総計	5.6%	4.6%	35.9%	25.5%	27.8%	0.7%	100.0%

「友達を裏切る」という行為を恥かしいと思う高校生が最も多いが、その割合は、茨城と東京では、10ポイントの差があり、東京における友人関係の希薄さがうかがわれる。

「友達を裏切る」行為を恥かしいとする高校生が過半数いるものの、そのグループも、いじめをめぐる経験については、他のグループと大きな相違はない。ここに、いじめ問題解決の困難さを見ることができる。

⑥ 高校生同士での逸脱行為の防止

(図表 50) 高校生同士での逸脱行為の防止方法



(図表 51) 高校生同士での逸脱行為の防止方法別恥の意識

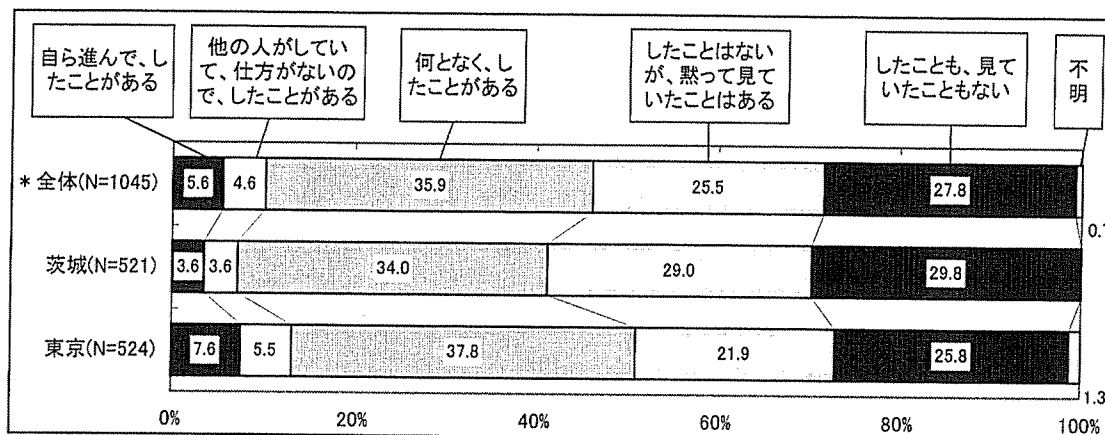
	法に違反	親に背反	先生に背反	友達を裏切る	決意を不実行	恥なし	不明	総計
注意	12.3%	0.7%	0.0%	51.2%	32.0%	3.4%	0.2%	100.0%
示唆	11.5%	0.4%	0.8%	51.2%	31.9%	4.2%	0.0%	100.0%
祈願	7.0%	0.0%	0.0%	56.0%	30.0%	6.0%	1.0%	100.0%
放置	7.1%	1.5%	1.0%	49.5%	30.8%	9.6%	0.5%	100.0%
先生伝達	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
親伝達	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
無関心	5.9%	0.0%	0.0%	36.8%	35.3%	22.1%	0.0%	100.0%
不明	14.3%	0.0%	0.0%	28.6%	0.0%	0.0%	57.1%	100.0%
総計	10.2%	0.7%	0.6%	50.2%	31.4%	6.2%	0.7%	100.0%

高校生の五人に二人は、万引きをしている友達に、「やめた方がよいと直接注意する」が、五人に一人は、「やめる、やめないは本人の自由なので、放っておく」と答えた。前者の割合は、茨城で高く、後者の割合は東京で高い。したがって、都市化の進展と友人関係における非干渉の態度とは関連があるといえよう。

「特に気にならない」や「やめる、やめないは本人の自由なので、放っておく」と答えた高校生で、「どれも恥ずかしいとは思わない」と答えた割合が高く、他人に無関心であればあるほど、自己の行為についても羞恥心・罪悪感が低くなるといえよう。

⑦いじめの加害体験

(図表 52) いじめ加害体験



(図表 53) いじめの加害体験別テレビの暴力シーン

	見たい	見たくない	まねしたい	思わない	その他	不明	総計
積極的関与	15.3%	11.9%	5.1%	54.2%	13.6%	0.0%	100.0%
義務的関与	4.2%	35.4%	0.0%	47.9%	10.4%	2.1%	100.0%
意識外関与	9.6%	20.3%	2.4%	57.1%	10.4%	0.3%	100.0%
傍観	3.8%	26.3%	2.6%	56.8%	9.8%	0.8%	100.0%
なし	5.2%	29.0%	0.7%	53.4%	11.7%	0.0%	100.0%
不明	0.0%	14.3%	0.0%	57.1%	28.6%	0.0%	100.0%
総計	6.9%	24.4%	2.0%	55.4%	10.9%	0.4%	100.0%

しばしば指摘されるように、加害者だけでなく、観客や傍観者の存在がいじめの構造を支えそれを永続化させているといえるが、この調査結果からも、高校生の三人に二人が「他の人がしていて、仕方がないので、したことがある」「何となく、したことがある」や「したことはないが、黙って見ていたことはある」と答えており、このグループの存在がいじめ問題の解決を困難にしていると思われる。

いじめを「自ら進んで、したことがある」と答えた高校生で、テレビの暴力シーンを「もっと見たいと思った」や「自分もまねしたくなった」と答えた割合が最も高い。しかし、いじめを「他の人がしていて、仕方がないので、したことがある」と答えた高校生では、テレビの暴力シーンを「もっと見たいと思った」や「自分もまねしたくなった」と答えた割合が低い。したがって、本来、暴力への嗜好性が異なる高校生が、いじめでは、共同作業を行ってしまっているといえよう。